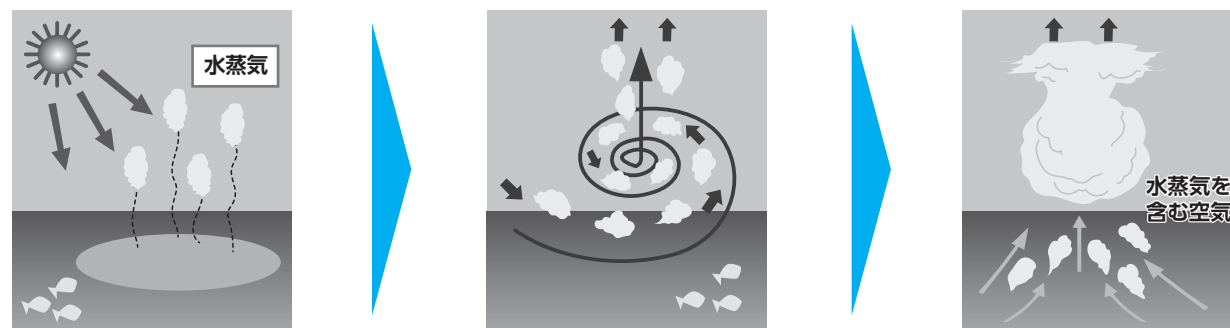




熱帯低気圧のうち、北西太平洋または南シナ海上に存在する、中心付近の最大風速が約17m/秒以上になったものを指します。暴風域・強風域を伴った大雨による、深刻な風水害が発生します。

どうして起こる？

暖められた海水が水蒸気になり、渦を巻きながら上昇気流を発生させ、上昇した水蒸気は上空の冷たい空気水滴となり雲ができます。そこへ湿った空気が流れ込み、積乱雲となります。水蒸気が水滴、雲になるときに放出された多くの熱が、周りの空気を暖め、上昇気流が強まり気圧が下がります。これが繰り返されることで、積乱雲が台風(熱帯低気圧)へと成長します。



- ①熱帯の海上に空気の渦ができる
- ②渦の中心に向かって多く水蒸気を含んだ空気が周りから流れ込む
- ③上昇気流ができる

- ①上昇気流により雲がつくれ雲は背高く成長して積乱雲に発達
- ②雲のできる過程で、水蒸気が氷粒に変化

- ③多くの熱を放出するためさらに周りの空気を暖め上昇気流が強まる

- ①繰り返されていくうちに小さな渦は大きな渦にまで発達
- ②熱帯低気圧になる
- ③熱帯低気圧がさらに発達し台風になる

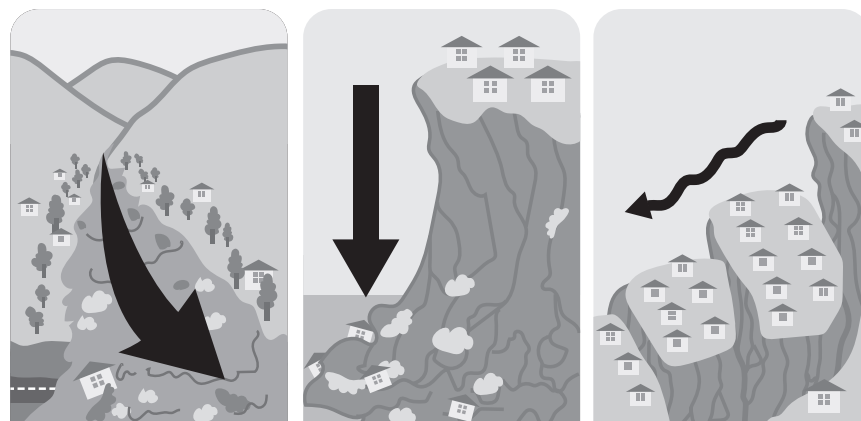
※台風周辺で竜巻等の突風災害が発生することもあります。



土砂災害とは、山や崖が崩れたり、崩れた土砂が雨水や川の水と混ざって流れ出て建物を押しつぶしたりする災害を指します。主な土砂災害として「土石流」、「崖崩れ」、「地すべり」があります。

どうして起こる？

雨、雪解け水、台風などが原因で、水分を大量に含み緩くなった地面が土砂災害を引き起こしやすくなります。



土石流

山や川の石や土砂が、大雨などにより水と一緒に激しく流れ下る現象

崖崩れ

雨や雪解け水、地震などの影響によって急激に斜面が崩れ落ちる現象

地すべり

雨や雪解け水が地下にしみ込み、断続的に斜面が滑り出す現象

風水害って

なんだろう？



「局地的大雨」とはゲリラ豪雨とも呼ばれ、散在する降水域が20～30km四方の広さに点在し、狭い範囲に短時間、激しい雨が降る現象です。「集中豪雨」とは、線状の降水帯が数時間停滞することで、広い範囲に長時間、激しい雨が降る現象です。線状降水帯は、長さ50～300km幅20～50kmの広さに及びます。

どうして起こる？

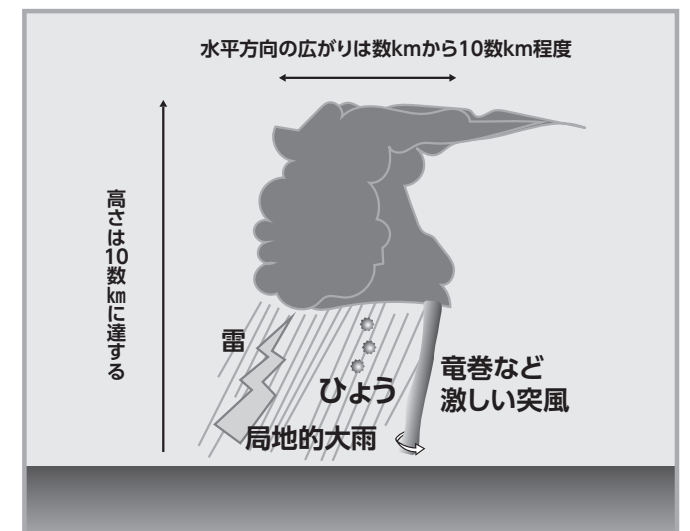
雲は、空気が上昇気流によって上空に押し上げられて発生します。上昇気流が強まり、雲が成長を続けると、「積乱雲」となります。積乱雲がさらに発達を続けると、狭い範囲に短時間で強い雨を降らせる「局地的大雨」をもたらします。積乱雲の寿命はおおよそ1時間で、雨を降らせる時間は30分ほどです。



積乱雲が次々と発生し、列をなして組織化した積乱雲群によって、数時間にわたりほぼ同じ場所を通過、または停滞することで作り出される強い雨を伴う雨域を「線状降水帯」といいます。これが広い範囲に長時間の強い雨を降らせる「集中豪雨」をもたらします。

風水害は、雨や風により発生する災害です。風水害はいつ起こるか分かりません。しかし、起こりやすい災害は予測できるものです。自分の周りではどんな災害が起こる可能性が高いのか、意識をして生活することで実災害のときの備えとなります。

図 自治防災課(☎581・2121内線371・373)



※積乱雲が発生すると、雷やひょう、竜巻などが発生することもあります。

線状降水帯の発生予測

気象庁は、令和4年度から「線状降水帯」が発生する恐れのある場合、半日から6時間前までに、気象情報の中で伝える取り組みを始めました。都道府県ごとに出される気象情報の中で“線状降水帯が発生する可能性がある”という文言が盛り込まれます。精度は向上していますが、現在は全国で2回に1回程度、地方単位では4回に1回程度の的中率となっています。

線状降水帯の代表的な発生メカニズムの模式図

